

F

鍵

鍵を拾った。

...なんだろう、この鍵...変な形。

実際に使うものなのか、ただのキーモチーフなのか...いまいち判断しづらい。

しげしげと眺めていると、鍵がいきなり動きだした。

「うわわわっ！」私は驚いて、思わずそれを手放してしまった。

鍵がぐにゃぐにゃと突然変形し始める。

どんどん大きくなってゆく。

やがて、鍵は一枚の扉になってしまった。

もうわけが分からない。

なんなの、これ...？

啞然としてはいたけれど、何故かその扉には、どこか灰懐かしさを感じられた。

この扉、どこかで見たような？

思いだせない、いったいどこで見たのだろうか？

気になって気になって、私は思い切って扉を開けた。

ここは...

辺りを見回した後で、後ろを振り返った。

全部思いだした。これ、子供の頃住んでいた家の玄関のドアだ。

少し変わったデザインで、友達のユカちゃんが珍しがってたんだった。

でも、だって、この家はもう取り壊されてるのに。

けれど、実物があって...無くなってなんかなくて、

と、そこまで考えて、心臓が大きく鳴った。

え...？

裏庭に向かう。

まさかまさかまさか。

私が知ってるあの人は、花が大好きで、写真にはあの人と花がよく写っていた。

「あら？」その人が私に気付く。

「お客さんかしら？」ずっと、会いたいと思っていた人が。

写真でしか知らない母が、そこに、いた。

火を点けた。

ゆっくりと火を点けた。

煙が立ち上る。

くわえたタバコからの煙が。

彼女からやめる様に何度も言われたのに、結局治らなかったな。

「タバコやめないと病めるわよ」なんて寒いダジャレを言ってたっけ。

思わず苦笑いをした。

でも結局病んだのは君の方だったね。

ゆっくりと火を点けた。

煙が立ち上る。

ソファやテーブルからの煙が。

君のいなくなったこの家になど、もう用はない。

からからと

からからと氷が鳴る。

みんみんと蝉が鳴いておる。

西瓜が食べたい。

木偶人形のやうに転がつてゐた私の耳に響いてきたのは明瞭な夏の音であつた。

次いで可愛らしい女子の川辺へ往こうと誘う声。

ああ、それも悪くはないやもしれぬ。

少少の面倒臭さを覚えつつ下駄を履き外へ。

からからと下駄が鳴る。

愛しき女の持つ傘が見へた。

踊るのは

私は踊るのが得意で、それに大好きだ。

ふふ、これでも昔は情熱的な踊りで女達を魅了したものさ。

毎日違う女と踊ったな。酒やタバコより楽しかった時期だ。

私は踊るのが得意で、それに大好きなんだ。

——そして人を上手く踊らせるのも。

さあて、今君は私ににさんざん踊らされたあげくなにもかも無くしちまった訳だが、あとはどうするね？

何か言いたいことでもあるか？何か差し出すものでも残ってるのか？

おや、こんな所に銃があるぞ。そういえばお前の踊りはどんなものだ？

踊るか？私が踊らせてやろうか？ん？

羊飼

羊飼いの少年は村の中でも一番の正直者として有名です。

ここ最近村では羊がたびたびいなくなる事件が相次いでいました。

どうやら狼が羊たちを連れ去っているらしいのです。

少年は、今日こそ狼を追い払う！と意気込んでいます。

夜になり、少年の大声と狼の悲鳴が村中に響きました。

狼は自ら切り刻んだ格好で村に現れました。

狼と呼ばれる少女は実に狡猾な嘘吐きだったのです。

助けて！あいつに襲われた！と少年を指差し、その場に駆け付けた村人にうったえます。

今までに羊を盗んだ狼を見たことのある、という人は、実は少年以外にはいなかったのです。

少年は言います。そいつこそが今まで羊を盗んでいた狼なんだ！と。

そんな彼の手には狼を追い払う為のナイフが握られていました。

あなたが村人ならどちらを信じるでしょうか？

動かないなななさん

ナナさんがさっきからずっと動かない。

6章 『動かないなななさん』

.....えー...っと。困ったなーあはは。

屋上に来たからには青春くさい話をするべきなのかねえとか
わりと本気で考えてたのに。

屋上に着いたら何を思ったのか、いきなりころんと横になるんだもんなあ。

とりあえず

「そんな寝転がってるとYシャツ汚れますよ」

無言。何を考えてるのか分からない表情だ。

「パンツ見えますよ」

無言。何を考えてるのか分からない。

「じゃあ覗いちゃ」

痛い蹴られた。

「あのね」

「はい」

「飛行機雲見えないかなって」

「...そうですか」

そうゆうことなら、と僕も寝転がる。ナナさんの隣、特等席に。

黙って星もとい雲を探した。

黙って雲もとい手を握りながら。

「見えるかなあ」

「見えるんじゃないですかねえ」

澄んだ空気

校庭から聞こえる運動部の様々な声と音

二人に見つめられて照れた表情の空

掌の確かな温度

僕の大きな心音

それが 僕の世界の全て だった

壊れた心臓ハ、

「壊れてしまったの、私。

仕方ないわ、だってだって壊れてしまったんだもの。

あら...？貴方の心臓、壊れかけているわ。

私のと交換する？

私、体は壊れちゃったけど心臓はまだ壊れてないのよ。

壊れた物は置いて行って。

私が全部ゼンブぜんぶ受け止めてあげる」

7章 『壊れた心臓ハ、』

寂れたその街に僕はいた

精巧な機械人形の作り手たちが集まって発展を遂げたこの街は

皮肉にもその技術を軍事利用され

それによって生み出された兵隊人形に破壊された

人々はこの街を去り

後には兵隊人形が徘徊するようになっていた

人間がこの街に入るのは自殺行為だが

どうしても僕はこの街に入らなくてはならなかった

やがて

狭く薄暗い路地の奥に

やっと彼女を見つけた

「壊れた物は置いて行って。

私が全部ゼンブぜんぶ受け止めてあげる」

ああ

僕も限界だから迎えに来たんだ

おいで

あと少しだけ共に稼働しよう

僕ももう長くない

最期はせめて長い時を共に過ごした家族と

あなたは神を信じますか？

「キミはさ、神様って信じる？」

8章：あなたは神を信じますか？

サキさんがTVを見ながら尋ねる。

何だろうやぶから棒に。

それ駅前でも聞かれたな一外人に。

...否定も肯定もちょっとな。よくわからないものをどうこうできないし。

宗教と政治は今の僕には少々不向きというかなんというか。

あとは...違和感だ。ナナさんが聞きたいのはなんか違うことのような気がする。

質問に答えて欲しいんじゃなく、僕がどんな答えを出すか、反応を見てる...とか？

「居て欲しいなとは思いますがね」

答えてるようで実はただ応えてるだけというか、曖昧に誤魔化す。

「そっか」

間。無言。静寂。気まずい。あの答えで良かったのかな。横顔からは真意が汲み取れない。TVの音なんてもうどうでもよくなっていた。

「ねえ」

「はい」

水槽に雫を落とすようなか細い声量で、けれど全体に波紋が広がるような、そんな、声で、

「私の事は信じる？」

ナナさんは僕を見て静かに言った。

.....えっと。

ナナさん、の、こと？信じるも何も、.....あ。

たぶん、これ、かな。

「...傍に居て欲しいなとは思いますが」

「そっか」

ナナさんの表情は変わらない。TVのほうに身体の向きを変えた。

黙ってTVを見ている。僕もそれに倣ってTVに向き直った。

と、ナナさんが僕にゆっくり体重を預けてきた。肩と肩が触れる。

それから特に喋らずTVを見ていた。互いに、寄り添って。

「妻に会うんです、何年も会えてなくて」

船頭の問いに私はそう答えた。

して、なんだってこんなへんぴな処に来たんだい、そう聞かれたのだ。

こんな処、と船頭は言うが、間違いなく彼女はそこにいる...はず...そのはずだが...

何故私はその事を知っている？何故そう信じている？それに私は...

いつからこの船に乗っていたのだ？

うまく思い出せない。

辺りを取り囲む、この雲のように濃い霧が私の頭の中に入り込んだりでもしたのだろうか？

「そいつぁいい、奥さんはさぞ喜ぶでしょうね」

そう言い彼はからからと笑った。

ええ...。本当にそうであってほしい。

一抹の不安を抱え鈍重な私の心を余所に、船は足を止めることなく進んでゆく。

——程なくして棧橋（何故だか異様に長かった）とそこに立つ妻の姿が見えた。

やっと会えた！愛しい妻に会えた嬉しさに思わず船から落ちそうになった。

おいおいお前えさん危ないよおと嗜める船頭には目もくれず妻をじっと見つめる。

...？何か変だ。

何故だろうか、妻は寂しそうな顔をしていた。

何故だ、長いこと会える日を楽しみにしていたのに、と考えていると。

「知っているわ」

妻の第一声がこれだった。知っている？何をだ？

妻は続ける。

「私だってそう。でもね」

そこまで言い、一旦俯いたが、顔を上げて。

妻は言った、まだあなたがここに来るには早すぎるわ、と。

何のことだ、何を言っている？説明してくれ。

意識がだんだんと遠のいていく。待ってくれ。

この時をずっと待っていたんだ。待ってくれ。

船頭が船を

来た

道を

引き返

して

妻が

手を

振って

遠く

霧が

近く

どう

なって

私

は